

# 「ゆーすぴあボランティア塾」(基礎編)

## ★事業の概要★

### 事業のねらい

1. ボランティア活動を行う上で必要な知識・技術について講義、実習をと  
おして習得する。
2. 青年が、様々な世代との関わりをとおして、人生を豊かに生き抜く力を  
身につける。

### 期 日

平成27年5月23日(土) ～ 5月24日(日)

### 会 場

国立大雪青少年交流の家

### 対 象 者

高校生以上でボランティア活動に興味関心のある方

### 参加者数：参加募集人数

28名：20名

### 講 師

青木康太郎氏(北翔大学准教授)  
棚橋 亨氏(北海道教育委員会生涯学習推進局生涯学習課  
生涯学習推進・施設グループ主査)  
松井 晃之氏(北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川社会教育主幹)  
高橋 克磨氏(北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川指導員)  
富田 誠氏(大雪消防組合美瑛消防署救急係長)  
中村 純基氏(大雪消防組合美瑛消防署救急係)  
千葉 昴輔氏(大雪消防組合美瑛消防署救急係)  
国立大雪青少年交流の家職員

### 日 程

|             | 10:15       | 10:45       | 12:15   | 13:00  | 14:30  | 17:30   | 18:30            | 19:30       | 20:30   | 22:00   |                  |
|-------------|-------------|-------------|---|--|--------|---|------------------|-------------|---|---|------------------|
| 5/23<br>(土) | 9:30～<br>受付 | 開<br>会<br>式 | オ<br>リ<br>エ<br>ン  | 青<br>少<br>年<br>の<br>理<br>解<br>と<br>青<br>少<br>年<br>教<br>育 | 昼<br>食 | ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>活<br>動<br>の<br>意<br>義 | 安<br>全<br>管<br>理 | 夕<br>食      | 青<br>少<br>年<br>教<br>育<br>施<br>設<br>の<br>現<br>状<br>と<br>運<br>営 | 青<br>少<br>年<br>教<br>育<br>施<br>設<br>に<br>お<br>け<br>る<br>ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>活<br>動 | 休<br>憩<br>入<br>浴 |
| 5/24<br>(日) | 7:15        | 7:30        | 9:00  | 10:00  | 12:00  | 13:00   | 15:00            | 16:00       |   |   |                  |
|             | つ<br>ど<br>い | 朝<br>食      | 青<br>少<br>年<br>教<br>育<br>施<br>設<br>に<br>お<br>け<br>る<br>ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>活<br>動 | ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>活<br>動<br>の<br>技<br>術      | 昼<br>食 | ボ<br>ラ<br>ン<br>テ<br>ィ<br>ア<br>活<br>動<br>の<br>技<br>術 | ま<br>と<br>め      | 閉<br>会<br>式 | 16:00<br>解<br>散   |   |                  |

# ★プログラム紹介★



「青少年の理解と青少年教育」

青少年教育の現状や課題を把握し、発達段階に応じた体験活動の必要性を学んだ。



「ボランティア活動の意義」

ボランティア活動の意義を理解し、活動における心構えや留意点について学んだ。



「安全管理」

子供たちの活動で想定される、救命救急に必要な知識と技術を学んだ。



「青少年教育施設の現状と運営」

公立青少年教育施設で実施されている事業と、教育的効果などについて学んだ。



「青少年教育施設におけるボランティア活動」

当施設の教育事業について理解を深め、ボランティア登録制度について学んだ。



「ボランティア活動の技術」

ウォークラリーのコース作成実習をとおして、活動を促進させる技術を学んだ。

## 企画・運営のポイント

プログラムが連続的につながるよう、各研修で要となるキーワードを研修室内のホワイトボードに位置づけ、意識化できるよう工夫した。

「新しい公共」型のボランティア活動について、実際にプログラム開発に関わるという実習をとおして、当事者意識を持つ大切さについて、体験的に学べるよう工夫した。

## 事業を終えて(成果と課題)

青少年の課題を丁寧に把握できたことで、事業や体験活動のねらいや意図を意識して、活動に取り組もうとする意識が高まった。

経験豊富な参加者も、講義や参加者同士との意見交流をとおして、ボランティア活動に対する自分の考え方を、再確認することができた。

年2回実施する養成研修会のうち、春の登録研修という位置づけで、広く札幌方面へも送迎バスを運行したが、送迎経費が予算の約半分を占めた。

## 今後の方向性

地元の大学については、サークル宛の案内など今後も重点的に広報を行う。本研修会の受講者に、継続的にボランティア活動に関わってもらえるよう、ネットワークを構築していくことが有効である。